

第 17 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 18 年 1 月 15 日（日）午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分

2 場所 上田情報ライブラリー 5 階 会議室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	宮阪 義彦委員
佐藤 元太郎副委員長	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員
荻原 拓次委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日は、お忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。

それでは委員長よりお願いいたします。

（飯島委員長）

ただ今から、17 回の高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

それでは資料の説明を事務局からお願いします。

5 資料説明

（植松主任教育支援主事）

それではお願いいたします。まず、他地区の推進委員会の状況につきまして、簡単にご説明させていただきます。

1 月 12 日木曜日でございますが、南信地区第三推進委員会で会議が開催をされております。

第 7 区の統合について、地域のコンセンサスが得られていないので時間が必要という意見も出されましたが、どの地区でもコンセンサスが得られて再編案を提出しているわけではないといった意見も出されているということでございます。次回結論を得るということでございます。

また、上伊那農業高校の定時制につきましては、箕輪工業高校で多部制・単位制に移行で合意したということでございます。

飯田長姫高校と飯田工業高校と統合について再確認をしましたが、飯田長姫高校の商業科の扱いが、統合後の学級規模について課題があるといった意見も出されているということでございます。

それから、昨日でございますが、14 日午前中、北信地区第一推進委員会で、会議が開催されております。

前回に引き続きまして、旧4通学区を中心といたしまして、多部制・単位制高校の配置、長野南高校、松代高校の統合について、集中的に検討が行われたということでございます。

多部制・単位制高校については、現状の高校を転換して第1通学区に配置をすること、その候補として挙げられている坂城高校と屋代南高校のいずれかを転換することとして、いままでの議論を総合的に客観的に判断して、よりベターな配置を決定するという方針が再確認をされたということでございます。

長野南と松代高校の統合については、さまざまな意見が出ているということでございまして、次回さらに検討を深めるということでございます。

また次回に向けて、いままでの議論の中から出ている方向性を報告書案として、委員長がまとめ、次回までに各委員さんへ確認をして、意見を出し結論を出していくということが確認をされたということでございます。

また、昨日午後でございますが、中信地区第四推進委員会でも会議が開催をされているところでございます。

こちらにおきましては前回に引き続きまして、報告書の審議を行い、報告書につきましても審議を終了したということでございます。今後、委員長が県教育委員会へ報告書を提出するという状況でございます。

以上簡単でございますが、他地区の状況についてご説明をさせていただきました。

続きまして、本日の資料でございますが、「第2通学区推進委員会報告書案」というものがございまして、これにつきましては、また後ほど委員長からご説明があらうかと思いますので、省かせていただきたいと思います。と存じます。

以下高校教育課植松主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

(飯島委員長)

ありがとうございます。前回、野沢南高校多部制・単位制に転換することにつきまして、抗議書が幾つか出てきております。十分これらを加味しながら、私たちの報告書は作成し、そしてまた当然のことながら、県教委が実施計画を立てるために、これらを十分精査し、踏まえ、最終報告を作っていただけるものと思います。

私たちは、真摯(しんし)に、私たちに任された審議を今日もお願いしたいと思っております。

いままで審議をしてきた中で、今日も要望書の中にもありましたので、定時制の対応についての議論をしておりません。この件につきまして、やはり議論を深める必要があらうかと思いますから、今日はそちらをお願いできればと思っています。

当然のことながら、定時制に関しましては、野沢南高にあります。小諸商業にあります。そして上田には上田高校、そして上田千曲高校に現在は定時制高校が設置されるわけです。県のたたき台におきましては、野沢南高を多部制・単位制に転換し、小諸商業は現状のまま、そして上田にある2校は第1通との関係もありまして、もし坂城になれば、坂城に統合という話が出ています。その辺も含めましてご意見をいただきたいと思います。

(原 委員)

それでは口火を切らせていただきます。

定時制にかかわっては、この委員会発足以来、再三再四主張してまいりましたことを、また同じことの繰り返しになりますが、確にかつての勤労就学という形とは随分変わってまいりましたが、現在の定時制がさまざまな生活歴や学習歴を持った青年たちの極めて重要な教育機関になっていると。不登校等で学校になかなか行けなかった子どもたちが大勢入学して、しかしそういう中で自分の居場所を見つけ、次第に就労時間を延ばし元気に頑張っているという姿を日々見ております。

そういう意味で定時制が今日かつてに比べれば、はるかに小規模ながら、重要な意味を持っているということを改めて確認をしたいと思うことです。

2つ目は、これも再三申し上げましたが、中学卒業した数がピークであった1990年平成2年に比べて、全体の生徒数は現在大きく減っておりますが、しかし定時制の生徒はその平成2年より増えているわけであります。

この間、定時制はこの近10年を見ても、この地域でいくと丸子実業が募集停止になり、という格好で、この地域に限らず幾つもの定時制高校が廃止になってまいりました。にもかかわらず生徒数は増えているということなのです。

そういう意味で、現在ある上田地区の2校、しかも上田地区の2校というのは上田高校が普通課程でありまして、千曲高校は機械科であります。この上田地区の2校そして小諸商業、そして野沢南については多部という問題が出てまいりましたが、これらについて存続をする必要があると、こういうことを申し上げて議論の口火を切らせていただきます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。ほかの委員さん方どうでしょうか。定時制高校の問題であります。

(佐藤副委員長)

この委員会では、多部制・単位制は必要であると、ある程度コンセンサスが得られたわけです。

そういう中で、この多部制・単位制はやっぱり1つには、私たちは必要であるという中に、現在ある定時制もその中へ含めて考えているのではないかと思います。

(中沢委員)

さっき原委員さんが、おっしゃったことと関係ありますが、いろいろな学習歴、生活歴を持っている中学生が定時制に行くという姿を見たときに、やはり簡単に統合はできないと思います。多部制・単位制ができて、ごく近くに定時制がある場合は、これはそこと統合ということも、無理はないということは思います。

しかしある程度距離が離れていた場合には、定時制の今現在行っているその生徒たちの姿を見たときに、やはり大人数ではだめなんです。1クラスがせいぜい20人。それ以下でないと、その子たちというのはなかなか位置付かないと、私は思います。

少人数だからこそ、その子たちはその中で活動ができ、自分の存在感があって学習活動

をしていけるということがすべていいとはい切れませんが、そういうことによって、その子は学習ができてくる。人間とコミュニケーションができてくる。そういうところはやっぱりあるんです。その辺は、やっぱり私は中学校の立場から見ますと、大事にしていけないといけないと思います。

従って、さっき言ったように、定時制が多部制・単位制のごく近くの学校ならば、これはいいいのですが、そうでない場合はやっぱり残していくという方向を取らざるを得ないだろう。

例えば、具体的に言うならば、今、小諸商業の話が出てました。これは商業科ということもあります。そういう特殊性もあります。それから距離的な位置的なことを考えても、残っていかざるを得ないだろうということもあります。

上田千曲と上田高校、これは坂城高校との関連で、なんとも言えない部分もありますが、上田高校の場合はさっきも言ったように、今1クラス30名超えてるような状況です。これはむしろ、私はできれば2クラスくらいに分けてやって、そして定時制の機能をきちっと果たせる方向に考えていった方が、いいんじゃないかということを思っています。

(飯島委員長)

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

県教委から出された定時制のたたき台は、野沢南高が多部制・単位制に変換すれば、その中にはそのまま定時制が残るわけであります。そして小諸商業はそのまま残るようなたたき台になっております。

そうしますと6通におきましては、現状では、たたき台の提案というのは現状のままというものであります。要は、この5通の2校の件について、1通とのかかわりがあるかどうか。そこが議論の中心になろうかと思いますが、その辺のご意見いただければいいと思っています。

(佐藤副委員長)

私の先ほどの発言ですが、今、定時制全体についての考え方を申し上げたわけです。

具体的に申し上げますと、先ほど県教委で示されております小諸商業の定時制はそのまま、それから野沢南に定時制があるわけですが、これは私どもの委員会では多部制・単位制高校は野沢南と決定しておりますので、これは野沢南に吸収する。

今、委員長がおっしゃられたように、問題は上田千曲と上田高校です。私はこの問題に関しては、先ほど申し上げましたように、1通にいずれにしても坂城か屋代南にできます。そうするとやはり多部制・単位制というのは、我々は必要であるという結論を出しておりますので、そうなりますと先ほども申し上げましたこととダブるわけですが、多部制・単位制を充実する意味で、この上田千曲と上田は何らかの形で、そちらの方へ統合することを考えているわけです。

それから定時制に関しては、しっかりした教育が、少人数教育が必要であるというご意見がございまして、多部制・単位制の内容に関しては、これから私たちも県教委も考えていくわけです。ですからそういう中で十分これから内容を考える。今まで見てきた高校の多部制・単位制ではなくて、長野県型の多部制・単位制を考えたならば、そういう定時制

で従来行われてきたきめ細かいホームルームや、いろいろなものを取り入れた形で対応していく。そういう多部制・単位制を作っていただきたい。そういう中でこの定時制の問題も解決していったらどうかということでございます。

（飯島委員長）

ありがとうございました。佐藤委員のご意見は、通える範囲に1通の多部制・単位制ができれば、そちらのへ統合したほうがよいだろうというご意見と受け取りましたが、よろしいでしょうか。

1通の経過に左右されることはないと思いますが、ただそれが上田から、かなり離れた所に多部制・単位制ができたときには、考えなければいけないことも出てくるかとは思いますが、その辺のところは、「ただし書き」でしておいて、私たちは1通の結果に左右されずに、議論をする方がいいのではないかなと思っております。

（和泉委員）

私も、佐藤さんの意見に賛成で、従来の区割り、第4区・第5区・第6区というやり方で来たのですが、当初区割りしたときのその地域の在り方や地域の発展などについて、ある程度あったと思うので、しなの鉄道沿線の中で通学の利便性等を考えてあげれば、4区と5区の問題はむしろ逆にその辺のところをクリアーして、5区と4区という分け方ではなく、坂城の問題も含めて考えたら良いと思います。

この前の意見では、こちらの5区、6区でということで意見参加できなかったのですが、全体の流れで見るときは、しなの鉄道沿線の流れの中で見れば、ある程度は救済できるので、そういう視野を広げたやり方はいいのではないかと理解しています。

それから定時制は、私自身も多部制・単位制の中である程度は吸収していかなくちゃいけないということで、ただその辺のところに定時制のよかったところはやっぱり配慮していくべきだと思います。

しかしどうしてもこの中で1つ引っ掛かることは、勤労のため学校に行けない。勉強したいけど働かなくてはならないという昔の発足の理念のころと、だいぶ社会変化によって、その辺の位置付けがだいぶ変わってきているような気がするので、その運営の中身やその辺のところも、やっぱり変えていかなくてはいいんじゃないかと理解してます。

例えば少人数ということですが、昔的に言うとそれに該当者が少なかったので、熱気というかやる気は満々だが、そういうポジションでしか学校に行けなかったということなんです。

ところが今は、登校拒否だとか、何らかの理由があったということの受け皿になっているんです。本来の教育の、私は今、企業として受け入れる中で、競争原理をある程度働かした中での人材でないと、過保護に育った子は非常に抵抗力が弱いと言うんですか。その辺のこともあるので、ある程度はやっぱり少人数の教育の中から、したたかで強い子どもの教育をしなければいけないと思います。

学校にいるときはある程度そういうところで行けるのですが、社会に出たときに独り立ちできる人材を、少人数であってもやっぱり育てていかなくちゃいけないんじゃないかと、その辺のところは非常に難しいのですが…。

社会的にその人が将来も生きていくという社会環境に合ってた、やっぱりある程度自分で努力したり、ある程度やっていかなきゃいけない部分があるので、そういう教育が、それは少人数だからできるとかできないとかいうことじゃなくて、そういう人材をつくらなくちゃいけないんじゃないかという部分が、どうしてもやっぱり気になる部分がありますので、そういうところの組織を作っていくということには賛成ですが、教育の中身については、そういう人材の教育育成をやっぱり理解してあげて、育てていかなきゃいけないんじゃないかということを感じています。

（飯島委員長）

ありがとうございます。1つは義務教育ではないということですか。

（和泉委員）

そうです。

（市川委員）

お願いします。これまで和泉委員さんからそのようなお話ありましたが、私がこれまで見てきた大田フレックス、静岡中央その他のところに関しまして見てきた中では、すべて多部制・単位制の性格上システム的な特徴が、まさに和泉さんが述べられたようなことで進められてらっしゃると思います。

いつでも誰でも自分のペースで学んで、選んで学んでいける学校であるということ。午前部、午後部、夜間部の3つの体制があるということ。この中に子どもの多様性に合わせた多数の多様の多くの科目が用意されていると、こういうところに特徴があるわけです。

従いまして、多部制・単位制が、先ほど言いましたように、その学区制だけでなく、通学の便利性、しなの鉄道沿線にある、小海線沿線にある、そういう観点で子どもたちはもちろんとらえておりますので、中学生はそういった環境が提供されれば、やがてはこれはもう多部制・単位制の学校に関して、そういう、「うたい文句」に着眼しまして、普通の公立全日制ではうまくいけないとなってしまった子どもたちは、もちろんそここのところに将来的には、中学生は進んで志願していくだろうと私は考えます。

従いまして、その本来の多部制・単位制の在り方がきちんとできるならば、そこにやがては、それだけの規模を用意しておりますので、間口を広く取って、社会適用を目標につくられている学校ということを理解していきますと、やがてはそこに中学生の志願は集中していくだろうと思います。ただほっておいても、本来の多部制・単位制高校が機能していけば、自然とその方向に動いていくように思います。

従って、ここを私たち見えないものですから、制度の動向が多部制・単位制ができてからわかってくる、見えてくるものですから、なかなかその場にと議論できないかなと思いますが、私はですからやがてはそうなるものでしたならば、これまでの定時制のノウハウをお持ちの先生方が結集して、多部制・単位制の方で力を発揮されているようなことがありましたら、いいかなと。私たちはうまくさらに進められるんじゃないかなと思います。

もちろん、その少人数ということも多部制・単位制の1つのメリットとして挙げられていることですので、必ずしも多部制・単位制になったからといって少人数ではないという

ように、私はいままでの視察を見て理解をしております。

さらにそれだけではなくて、私は中学側から見てどういう高校になるのか将来のことを考えまして、今のように申し上げているわけですが、多部制・単位制の性格としまして、これまでの高校を中退してまたやり直そうとする青年後期の、多数の潜在治療が満たされるものですので、これは相まって、非常に多様な学習環境を地域に提供するものとなると考えております。

従って、例えば定時制の先生方の、定時制の高校の先生方の力を結集するような形で、新しい多部制・単位制を沿線に用意していただくということは、私は今後のいい方法かなと考えております。

(原 委員)

まず第1に、多部制をつくって、そこで定時制の生徒を吸収していくという1つの議論があるわけですが、前も申し上げましたが、多部制の中で、例えば午前部とか午後部にある部分はなるほど移行していくことはあるだろうと。しかし全体として、多部制が現在の定時制の生徒諸君を移行させるだけの、それだけのシステムにはなりにくいだろうということを、私はかねがねから申し上げているのです。

実は、これは中学の先生やそのほかの皆さんも体験的にわかってらっしゃるだろうと思いますが、不登校の子どもたちが大変比率が高くなって、小学校のうちからあるいは中学になるとなおさらというわけです。

今日ある学校的空間とでもいいでしょうか、大勢の集団でいわば規律正しく動くということになじめない、あるいは絶えず競争させられるそういうことになじめない、あるいは学校もさまざまな形で規則を作ったりいろいろな形で管理をするわけですが、そういうことにもなじめないという子どもたちが、実は非常に増えているということが、今大事なことなんです。そのことをいいとか悪いとか言うことではなくて、そういう事実を正面から見るとということなんです。

もう1度繰り返しますが、集団性とかあるいは競争的な学校、あるいは管理的な学校、こういうものになじめない子どもたちが非常に増えてきて、形態としては不登校になったりする。そして何年も不登校を続けていますから、全日制課程には進めずに定時制に来るという、ここの問題です。ですからそうした所をよく見ると、多部制がそういう子どもたちを、大方を救うという形にはなりにくいということを申し上げているのです。

2つ目は、さらに具体的な問題で、上田地区のことを申し上げますと、先ほど、どなたかがありましたが、上田高校は県内の定時制でも極めて大きな規模を持っています。本来に1学年20人は、はるかに超す30人以上の生徒が今いますけれども、2クラスが必要になってくると思うのですが。

具体的に申し上げますと、例えば坂城や屋代南というような案が第1通学区では話があるようですが、この問題は上田駅と坂城と考えてはいけないのです。

本当に定時制の子どもたちは、ごく至近距離に本当にごく近くに学校があるということでしょう。従ってそういうことだけで考えれば、上田から出て西上田を抜けて坂城に行くでしょうが、しかし皆さん考えてください、真田からあるいは依田窪から非常に広い地域から来ているのです。

県教委の教育行政文書というのは、すべてこの駅と駅とか、学校と学校という格好で距離を考えがちですが、そこは非常に広範囲からそういう諸君が来ているわけです。それをさらにまた列車に乗って行くということは非常に無理があると、このことを申し上げているわけです。

多部制・単位制の問題にかかわって、もう1言付け加えたいと思いますが、多部制は、はっきり言って長野県ではまだ経験はしていないわけです。従ってその多部制がやがて発足して、本当にそこでどういう効果を上げ得るのか、あるいは上げたのかということをよく見て検証して、定時制の問題をゆっくり考えると。

本当に私が言っているように、定時制は現状のまま存続させるのがいいのか、あるいは多部制の中でも十分その子どもたちがいろんな困難から自立の道を歩み出せるのか、そういうことを時間をかけて見みながら検証していくということが、極めて教育的な考え方ではないかと思うのであります。

(飯島委員長)

原委員から教育的見地からご意見をいただきました。

(小林委員)

私は、望月高校の多部制・単位制を考えていたときに、1部、2部と3部はということからいろいろ考えまして、そのときはいわゆる3部も含めての多部制・単位制ということで考えていき、委員の皆さま方も利便性ということでどうだろうかということで、蓼科と統合となったかと思っております。

今のように、定時制だけとなると、あのときの議論とまた違う方向へ行っているのではないかと思うのは、私だけでしょうか。

そのような見地に立ちまして、今、第2通でどこへくるかという話ですが、逆に、2通が野沢南高校へと決定したということにおいて、1通はまたどのように考えるかということです。今、新聞報道それから進ちょく状況の説明でしか承知していませんが、坂城あるいは屋代辺りということが、それ以北になったときには、またそれなりに厳密な対応をしなければいけませんが、私たちはそこまで考える必要はないと思います。今のところその方向で考えていきたいと思っています。

利便性ということで出ましたが、前回もちょっとお話申しました、野沢南高校学校要覧ですが、定時制ですと列車通が61分以上の生徒さん、それから特別なことだと思いますが、間借りして定時制に通っている子どもさん、自動車に通っている子どもさんというようなことで、その子その子の特色と言いますか、独自の環境によって、通う距離が異なっていると思いますが、それなりに遠方からも来て勉学に励んだり、あるいは昼間お勤めしているのかそこまではちょっとこの資料からはわかりませんが、それぞれ通って来ているなと思います。

1部、2部の方は昼間と同じでいいですが、今の定時制の子どもさんもそういうことで遠方からも通って来ている。南牧村や軽井沢町、小諸市はもちろんですが、その他というように広範囲から定時制に通ってきているという状況を考えたときに、先ほどの望月高校の例からいきまして、広範囲から通えるのではないかなと思います。

それが今議論になっている少人数ですが、フレックス高校を見させていただきましたが、学習しているときに 10 人以下の教室が多いということ、松本筑摩高校でもだいたい 10 人割るようなことがあるという話もありました。そんなことから実際の運営面では、人数はその程度になるのかなと私は想定しております。

（飯島委員長）

ありがとうございます。多部制・単位制を設置するという私たちの方向性から始まって、小林委員からは意見を頂きました。

私自身も当然のことながら、1 通の多部制・単位制がどこにされるかということは、頭の中には置いておかなければいけません。ここで前提として考える必要はないだろうと思います。

万が一、今、小林委員が言いましたように、しなの沿線よりずっと離れたところへそれが設置されれば、私たちが上田、上田千曲をそちらと一緒にという最終報告をしても、実施計画の中にはそれは当然見直されていく問題だろうと思いますから、それは考えずに、考えていきたいと思っております。

そんなことからどうでしょうか、多部制・単位制へ、上田、上田千曲の定時制と一緒にするというご意見だいたい多いようには感じますが、中沢委員、原委員からはそのまま存続というようなご意見も出ております。

もう少しご意見頂いて、また皆さんにまだお諮りしておりませんが、私と佐藤副委員長と報告案の原々案のたたき台を作っております。その最後のところに、定時制の問題、私たちも意見を述べていかなければいけない。と、思っておりますがいかがでしょうか。

（荻原委員）

定時制につきましては、原委員さんの言うとおり、やはり不登校やいろいろ学習歴がありますが、県の資料によれば、高校生で 432 人不登校、中学校で 1,337 人、小学校で 336 人という、17 年の発表があるわけです。そういった格好でそれぞれ高校で言えば 0.8 パーセント、中学校で 2 パーセント、小学校で 0.26 パーセントとなっているわけです。

そういうことを考えると、望月と蓼科の、望月高校の多部制・単位制への転換を審議したときに、利便性ということで退けられた経過があります。そういう意味では子どもたちの多様化、そういうことに対応できることになれば、定時制についてもやはりただ合理化するだけがいいわけじゃなくて、そういった利便性あるいは子どもたちの高校生活を考えれば、やはり従来の恰好の中で少し残しておかないといけないと思います。

これですべて多部制・単位制に定時制自体がほとんどがいくわけですが、そういうことはまだ具体的な保障がないときに、すべて合理化していいのかなという疑問は持っています。

私としては、もうしばらくその様子を見ながら定時制については、時間をかけていかなくてもまずいと思っております。

(遠山委員)

定時制の実態については、詳しくはわかりませんが、なぜ上田に 100 人以上も集まるのでしょうか。その学校の近所の人は非常にいいわけですが、私どものような地域から行けば、20 キロも車に乗っていかねば定時制へも行かれない状況です。

定時制と言えば、ちょっと頭の中に浮かんでくるのは、卒業するまでに 4 年掛かるとそういうことを聞いてます。

それで上田高校にこれだけ集まるというのは、定時制とは言え「上田高校」という名前が欲しいと思うのです。定時制を出ても「上田高校卒」というものがもらえることに魅力がある。わざわざ遠くから行くのには、そうじゃないですか。その考え方は間違いでしょうか。

これだけ多く上田高校に集まる。ほかの学校は 10 人か、千曲も 16 人、15 人ぐらいですね。上田市内の高校の約半分です。千曲の定時制、これは目的を持っていくと思います。何か技術を学ぼうとか、どこかに勤めていてもっと何かを勉強したいとか、そういう人たちが行くと思います。20 キロも離れている所から見ると、中心部は学校がたくさんあり、恵まれていると思います。

ですから、例えば上田高校の定時制をなくし、小諸商業高校に集中的に定時制を設ける。これも将来を考えれば、できると思います。これはみんな私ども都市部から遠いところへ住んでいる者の思いからで、あんまり交通の便もいいし、教育的に恵まれているから、こんなことを言うことになるのではないかと思います。もし間違っていたらご指摘いただきたいと思います。

(西村委員)

今の遠山委員の答えにはならないかと思いますが、私が聞いたことだけちょっとお話ししますと、上田高校では「0 時間め授業」、これはいろいろな定時制を持ってらっしゃる学校がやってらっしゃいますが、授業の前にもう 1 時間やります。これを夏休みやられたらほとんど全員が来たらしいのです。やっぱり勉強したいという子も上田高校の定時制に来られているということを聞きました。そういった学校です。だから少人数ということも大事ですが、そういった子どもも来ているのも事実です。

私自身今回の定時制の問題につきましては、基本的には佐藤委員のご意見に賛成です。基本的には、我々が多部制・単位制をどういった学校にしようかといった中で 1 つセーフティネットも必要だというご意見もありましたので。

ただ皆さんがおっしゃるとおり、やっぱり立場的に弱いと言っては大変失礼ですが、そういった子どもが定時制に求めてくるのは事実なので、通学の問題では、ある程度本当によく配慮をした学校づくりは、私は必要かと思っています。

そういう面でその坂城、屋代南というのはいろいろ出ていますが、基本的には私は多部制・単位制に吸収していくべきだと思いますが、やはり通学の問題だけは最初から配慮して考える必要があると思っています。

(中沢委員)

私の先ほどの発言で、ちょっと不十分な解釈されるといけないので補足します。

多部制・単位制と定時制はかなりシステムの、似ている部分は確かにあります。

例えば、太田フレックスを見せてもらったときに、例えば、1学年が40とかという人数があっても、実際的には、コース別にして10何名ぐらいの生徒が小さな部屋で勉強している姿、これはまさに少人数に結局は編成替えをしていると解釈をしていいと思うのです。

そのコース別によって、本当に自分の合ったところを選択している。基礎的なことを学ぶ基礎コース、標準的なコースそれから発展コース、今、そういう3つに分けて英語だと数学をやっていました。

そうやって少人数でやっているということと、それから管理面においても自分の生活スタイルに合っているそういうカリキュラムです。例えば、不登校傾向の子どもは、きちんとした生活の中で残念ながら朝早くなかなか起きられないとかこれは病氣的な要素もありますし、いろいろな生活スタイルもあるのですが、そういう中で、時間の1つの壁が多部制・単位制の中では取れてくる。午後から出てくるということも可能であるし、あるいは夜間ということも考えられるし、その中で自分の必要単位を取っていく。必要によって場合によっては4年かけずに3年で卒業ができるというそういうシステムも残っている。

そういう点では、先ほど原委員さんが言ったように、集団的にもなじめない、だから強制的な中でなじめない、管理面でなじめない。そういったことが多部制・単位制の中ではかなり解決できると、そういうものが見えてくると思います。

ですから定時制が、少人数のものをやはり多部制・単位制にも生かして、多部制・単位制を大きくしないで、実際的に授業は少人数でできるようなシステムを作っていけば、定時制の形もかなりそこで吸収できるのではないかと思います。

問題は、通学距離的な問題だと思います。私がさっき言ったような、近隣にそういう多部制・単位制があれば、今の定時制も吸収できるだろうということを申し上げたのです。

上田高校の普通科の定時制、これが例えば仮に、屋代南に第1通学区で多部制・単位制ができた場合には、かなりこれは配慮が必要で、私も結論的なこと、ちょっと迷っちゃいます。坂城にできれば、私はそういう子はそう遠くはないから可能であると思います。

ただ1つ上田千曲は学科が違うのです。普通科ではなく工業科です。機械科なのです。それを即吸収できるかということについては同じようには考えられない。これは同じように小諸商業も商業科です。だからこそ野沢南高と一緒にできない部分がある。その辺を、やっぱり特殊性を考えていかななくてはいけないかなと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。補足説明であります。前向きというとまたいろいろ異議をはさまれてしまいましたが、原案に近いところで賛同のご意見のようにお聞きいたしました。

ただそれが坂城以北になると、通学距離等で少し考慮する必要があるだろうということでもあります。私もその普通科であれば多部制・単位制の中に入ってもいいと思いますが、県教委にお聞きしたいのですが、いままで定時制の、そういう職業科の学校が、どのような形で縮小と言ったらいいのでしょうか、統合なり、なくなっていった。その経緯がわかれば、又、子どもたちの動向もわかればお願いします。

(吉江高校教育課長)

定時制につきまして、いままであまり議論がなされていなかったと思いますので、それで定時制の関係につきまして、ちょっと申し上げたいと考えております。

まず以前お配りした資料の中に、定時制の生徒さんのいわゆる主な入学の動機というものをお配りした経過がございました。それをまた改めて、主に第4回目ぐらいに資料で出しておりますのでご覧いただければと思っております。

基本的に1つとすれば、高校の卒業資格を欲しいというお子さんの率がおおむね5割ぐらいでございます。それともう1つとしまして先ほどからお話が出ておりますが、経済的な事情で働かざるを得ないというお子さんの比率というのが、おおむね7パーセント台ぐらいの状況でございます。

ですからいろいろなご意見賜っておりましたように、今現在はそれぞれのお子さんの現実問題としましては、勤労学生の方は極めて少ないという状況になっております。

それで長野県の場合には、直近ではまずは丸子実業高校と松代高校の定時制を統合した経過がございました。これはやっぱり全体の中で先ほど来お話がございましたように、勤労学生という位置付けでの定時制というような生徒数が非常に減ってきて、今現在県下で1,600人ほどいらっしゃるんですが、確かに最近は若干微動傾向ではございますが、過去の数字に比べますと非常に激減しております。

そんなことから過去その2つにつきまして統合を行った次第でございます。それとさらに直近では、平成16年の4月から須坂高校と岡谷工業高校の定時制につきまして募集停止をかけてございます。ですからこの2校につきましても、あと1、2年で学校の定時という位置付けではなくなってくるというようなことを行っております。

またさらには先ほど申し上げましたように、高校の入学資格を欲しいという意向が多いということ、それと以前は働きながら定時制に通うということで、例えば工業志向とか商業志向的な要素があったわけですが、現状においてはむしろ普通科志向が定時の場合にも多くなっているということを私ども認識しております。

そんなことから平成15年度には、従来は中野実業高校におきましては工業系の定時制であったものを普通科に転換するというような形もしております。

そのような経過の中で、私ども考えておりますのは、1つの流れとすれば定時制につきまして、今現在確かに普通科と工業科と商業科がございしますが、方向とすれば恐らくは普通科の方向に移行しつつ、また議論いただいております多部制・単位制との設置の中で、ある程度の連携の中での統合を図っていくということで、それぞれの皆さん方、いわゆる生徒さんの中のご要望に答え得ると考えている次第でございます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

定時制の学生の職業科に対する意向というのですか、また定時制に通学する学生の傾向がおわかりいただけたと思います。

(荻原委員)

多部制・単位制を受け入れという恰好で、解決できればいいのですが、例えば学校のいろんな取り組み方を見れば、6、7割が不登校経験で、定時制普通科としては少人数で細やかな授業と、あるいは中学は学業不振あるいは不登校の、あるいは他の高校の不適用の方が行っている姿も多いわけです。

そういう意味では、具体的に皆さんの小諸商業とかそういうところでは、個に応じた指導あるいは個に応じて中学からの教科書をもう1回やるとか、そういった非常に各校の定時制の取り組みを見ますと、本当に個に応じた指導、あるいは一人ひとりに寄り添った恰好で相談体制を充実させていますと。非常なそういった意味ではいわゆる不登校あるいは学習不振の皆さんが来る学校としては、非常に努力されていることだと思うのです。

それで例えば、千曲高校の定時制では、資格取得の始業前講座や様々な取り組みをやっているわけです。そういったものが具体的に多部制・単位制で移行したときに保障されてくるのか。

単位制と定時制はうんと違うのです。学年制のような恰好でございますので。そうした恰好で、例えば生活支援や保護者との懇談会など、そういうことは実際には多部制・単位制ではやっていけるのかどうか、非常に私は疑問に思うのです。

そういった意味ではセイフティネットとしても、多部制・単位制はそういう機能あるのでしょうか、こういった恰好で定時制をやっていることが受け入れられるかどうか、保障されるかどうかそういうことに非常に疑問を感じるわけです。

(佐藤副委員長)

何遍も申し上げましたように、多部制・単位制はこれから長野県に合った内容で考えていくわけです。太田で見てきたとか、先発の静岡中央でやってきたのをそのまま取り入れるわけじゃなくて、これから中身は考えていくわけです。

そういう中で私は以前から申し上げましたように、この多部制・単位制というのは本来現在の定時制の生徒に対する教育面から考えたときに、以前から私はこれは合わないということを言っていました。ですが、これからは多部制・単位制をそれに合わせていくという中身をこれから作っていくわけです。

ですから私は、この多部制・単位制が野沢南に一応決定したわけですが、その中身として少人数教育あるいはできるだけホームルームを多くするとか、そういう定時制でやってきた中身をそこへ移行する。それから先ほど中沢先生がおっしゃったような、例えば千曲の機械科の定時制というお話ございましたが、場合によってはこの多部制・単位制の中にコースとして、必要ならばこれを入れていくという大胆な、やっぱりこれから中身づくりをするわけでしょう。ですからもう決まったわけですから、これから多部制・単位制のいろいろな機能を発揮できるようなノウハウをその中へ導入して、そして長野県らしい多部制・単位制をつくっていく。

だから場合によっては進学型のコースもあれば、今言った、いままでの定時制の教育を補完するようなコースもある、それから職業教育にも対応できるようなコースを作っていく。こういうことが長野県らしい多部制・単位制をつくっていくことじゃないでしょうか。

ということで最初からわからないからもうだめだというんじゃなくて、もうここまでき

たらつくるということに決めたわけですから、多部制・単位制を推進委員会では。だからその方向に沿って、いろいろのメニューをその中に入れて構築していくということを、私はやらなくちゃだめかなあとと思います。以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

佐藤委員からまとめていただいたような形になりましたが、今言った心配要素をすべて私たちは網羅して、多部制・単位制の中でつくり上げていくんだという、そういう意味合いであろうと思うのです。

現状では多部制・単位制へ移管するというような形で、この後、報告書の原々案へ移っていきたいと思います。いかがなものでしょうか。その中で今言ったような、こんなことを入れたらどうだろうかというご意見をいただき、前向きに報告書をつくり上げていくというような形にしたいと思いますがいかがでしょうか。

（原 委員）

佐藤委員さんがおっしゃっている意味はよくわかるのです。多部制は、長野県らしいものを他県のまねではなくてつくると。しかしそれは、ちょっと私は厳しい言い方をしますが、そういう新しいものをつくって新しい中身を期待するわけですね。現実にならうかどうかということは、どれほど努力してもさまざまな制約というのがありますから、期待するのはいいんですが、その期待値で「そうなるから」「そうなるであろうから」、現状の定時制を統廃合してもいいというのは、少し危険じゃないでしょうかということを私はいっているんです。

しかもそれは、少人数の問題についてはもうこれ以上言いませんが、何遍も言っている家から近いところに通えるということがひとつの絶対的な条件であるということを申し上げてきましたが、そういうことが十分配慮されず保障されず、そして今議論の中でそういうことが期待されるから、実現を期待されるからいいだろうというのは、私はもうちょっとそこは慎重に考えたほうがいいと思っているのです。

（飯島委員長）

それでは、そちらの決定に関しましては、定時制に対してもう少し先送りをしたいと思います。そして報告書の原々案を検討していく中で、今言った原委員のご意見、あるいはほかの委員さんの中から出たご意見の中で、また新たな定時制に関してはこうしたほうがいだろうという意見が出ようかと思います。その時点で多部制・単位制の移管するなり、例えば1校ぐらい残すという意見になるのか、その辺のところはその時点で考えるというような形でいきたいと思いますがいかがなものでしょう。

はい、ありがとうございます。

それでは、定時制に関しましては、そのような形でこの後処理をさせていただきたいと思います。それではお手元に第2通学区推進委員会の最終報告書（案）というものを、本当のたたき台ではありますが、佐藤副委員長と相談しながら、そのような形を取りあえずお手元のペーパーとしてお配りするような形を取らせていただきました。

当然のことながら、最終報告案を今日完成するということは難しいかとは思いますが、じゅうぶんご意見をいただきながら、当然のことながらもう1回くらい委員会を開かないと、これは難しいかなと思いますが、ここでご意見をいただけるものはじゅうぶんご意見をいただいて、また事務局でまとめていただき、また今日委員会が終わっても、こんなことを追加してほしいということは、事務局を通しながら私、または副委員長へいただいて、それをまとめていくというような形で考えていきたいと思っています。そんなことでお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。

それでは、お手元のペーパーに沿って順次進めさせていただきます。「はじめに」というところがありますが、これは委員会が設置されたそのありがたということではありますが、一応私が書かせていただこうと思いますがよろしいでしょうか。2以降から皆さんのご意見をいただければと思います。

まず推進委員会の審議からということで、長野県教育委員会から検討を依頼された事項であります。これを取りあえず私たちは、検討依頼事項ということで依頼されましたから、それについてそれぞれ、ある程度意見を述べていく必要があるんだろうと思います。

その辺のところでもしご意見がございましたらば、一つ目は魅力ある高等学校づくりについてということでありまして、二つ目は総数決定基準に基づくうんぬんということでありまして、三つ目は総合学科および多部制・単位制の配置に関する事項。その他ということで、私たちは依頼事項で受けております。特に大事なものは、「魅力ある高等学校づくり」ということで記載しなければいけない事項は、じゅうぶん私たちの報告書の中には記載するべきだろうと思っております。

(小林委員)

私たちが一番願っているのは、県下の高校がすべて魅力があるという、ここに挙げた、高校だけではなくてと、これはぜひそのようにしていただきたいと思っています。

この高校再編整備というのは、こういう会議を始めて、県民が高校へ向ける目が厳しくなったのではないかなと思っています。高校の先生方は、多分自分の学校を見直し、また生徒をじっくり見詰め、その上地域と連携を取り、一体になった。そう言っては申しわけないですが、かつてないようなそういう日々をおくっておられるのではないかなと思っています。

そこで先生方も自分の学校の魅力とは何かということで、日々取り組んでおられる。こういう意味においては長野県の高校教育について、これはひとつ特記すべき事項になっていくのではないかと思います。以後あまりそういうことを努力しない学校、あるいはそうしなかったところというのは、もう10年もしたときに、またこういう話が出たときには、当然差が出てくるのではないかなと思っています。

それで、前に各学校の高校の取り組みということを見せていただきました。それぞれの学校が、それぞれ独自に努力しておりますし、こんな面は誇るべきことだというようなことで、いろんな面で報告の資料をいただきましたがこれは大変すばらしいことだと思いました。それと同時に、その学校独自の取り組みもありますが、これはその学校に行った先生方が一致団結し、努力したことであるから、その学校でまかれた種は、また新たなとこ

るへ行ったときに、芽を出し実を結んでいくように、ハード面だけではなくてソフト面で、もっともっと県教委主導で、高校をレベルアップできるそういう要素はたくさんあるのではないかとと思っています。書かれた内容を事務局としても大事に扱って努力していただきたいと思っています。

1 回目のときでしたか、高校再編整備にかかわる魅力づくりの例というのを出示していただきました。大変すばらしい内容です。あくまでもこれは「例」として出されてますので、この内容を私たちは正面切ってどうするか。どう取り組んでもらうか。どの程度の内容を含んだ報告ができるかわかりませんが、例えば学校の自主性、自律性の構築にかかわる事項というようなことで、学校運営に関して、人事面では教員公募の仕組みづくりと。これは2、3、今まだあるやには聞いたのですが、これは今までの長野県の例とすれば、そんなにはないことです。

これをぜひ行うような高校。それから各学校の魅力づくり、または特色に合わせて学校長が教員をリクルートできる仕組み。これは大変なことです。いろんな面で、こういうようなことで例としてではなく、実際にやるんだ、できるんだと。こういうふうにしていくんだと。ニュース的にある学校でやるということではなく、それをどのように県下各地でできてるかということが、大変なことかと思えます、こういうようなことを記載したいと思えます。

それから予算面でいきますと、学校長の裁量で執行できる予算の拡大。多部制・単位制でもなかなか現状の校舎を使って、現状の施設でなるべく金を使わないような方向でとありますが、今、例の拳がった高校だけではなく、県下の高校全体にこういうものをどの程度広げられるか。広げてその学校の魅力ある、特色ある高校づくりに役立つのではないかなと思います。

そんなようなことで、「例」としてではなく私たちは、じゃあこういう方向で、全体とすればこうだよ。その中で今再編整備で名前が拳がった高校についてはこうであるというような、そういう段階で進めればいいのではないかなと思います。

今私が申したどれひとつ取っても、大変なことですし、またそれをやっていってもらわなくてはいけないことだし、それが次回に高校再編整備になったときに、金が掛かる、というようなことになっていくんではないかなと心配しています。

県民全員が、どの高校も魅力があると認識できるような、そんな高校になったらいいと思っています。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

もうかなり具体的なご意見をいただきました。進行上、ちょっと不適際があったと思いますが、まず全体のこの報告書の、全体の大枠を見ていただいて、そしてこんな形式でよければ、今のような形でご意見をいただくほうがまとまるかなと思いましたものですから、ちょっとペーパーを順次見ていただきたいと思います。

2 番目、推進委員会からの審議からということで、1 番目、今、小林委員からいただいたような県教委からいただいた検討を依頼された事項について、その他の事項についてということです。

1枚めくっていただきまして、第5区についてであります。一つ目で丸子実業高等学校を総合学科に転換という、こういう報告に対しての転換にあたって、転換後のイメージということで意見等、今まで出たものをある程度議事録の中から抜粋したものであります。

それから、そのほかの5区の高校についてということであります。そして4番目、もう1枚めくっていきますと、第6区についてであります。現在の全日制11校を9校に統合していくということであります。これは1番目の教育委員会から検討された事項が、そのような形になりますから、それについての意見。そしてそれにつなげて、2として望月高校と夢科高校の統合に関して、その点。また意見をいただいた中で、統合後のイメージというものを列記させていただきました。

そして3として、野沢南高校を多部制・単位制高校に転換。これは転換にあたって、転換後のイメージ、このイメージのところでいろんなご意見等をいただいている。それからそのほかの第6区の高校について、ご意見をいただいたこと。そして最後に保留になっております、定時制の再編についてということであります。

これはそれぞれ上田千曲、上田高校、小諸商業、野沢南高校の定時制のということであります。そして、最後に終わりを付けて、あと推進委員会の検討委員会の委員会の何時開催したかということからはじまっての経過、そして我々の名簿を付けて報告書を作り上げたらどうかなというのが原案であります。骨子がよろしければ、その中の内容をそれぞれ今、小林委員からご意見をいただいたように進めていき、まとめていったらどうかなと思います。

どうでしょうか。たたき台ということで、こんな方向で。もし何かご意見があれば。

(荻原委員)

いよいよ最終段階に入ったわけですが、今まで教育観の違い、あるいは立場、価値観の違いの中で皆さんと色々な議論をしてきたわけです。

そういう中で、私もささやかな意見表明と意思表示をして、それでお互いに認め合いながらこうやって積み重ねて結果、前回欠席しましたところで多数決という、強行着陸的な部分があったことについては、ちょっと疑問を感じているわけですが、そういう中でやはり野沢南の多部制・単位制への転換が決まったわけですが、そういう中で240人の1年生を迎える野沢南の転換に関しては、教育委員会の実験台としてはいけないんじゃないかと思えます。

あるいはこういった多部制・単位制、それから定時制の統合に対しても、こうした高校の教育システムあるいは多様性、少子化、財政問題といった、本当に閉塞したこういう状況の中で、どうも話し合いとか改革的じゃなくて、非常に革命的な部分が、私は教育委員会としては多かつたのではないかと考えています。

その第一は、やはりたたき台という政策を出してきたわけです。ここに関しては非常に対案あるいは対策を取りにくい格好のたたき台という部分で、注目度は抜群でしたし、そういった意味では、私に言わせれば非常にうまい方法でやってきたなど。それに対して私は対策も、対案もつくれなかったわけですが、そういったことに関しては、やはりいろんな団体あるいは職域団体、それから自治体の首長、議会、そういった方から、もう少し時間をかけてやったほうがいいじゃないかというお話があるわけですが、それに関してこう

いった最終報告で地元、地域の合意というものが実際に得られていくかどうか。

得られるということが前提ですが、そういった中ではいろんな抗議声明とか、いろんなものがここへきて出てきているわけですが、それに関してやはり教育委員会では推進委員会としてもそれに答える部分でふさわしい最終報告にしなければならないと思っております。

基本的には私は、15歳の春を泣かすなど。あるいは高校3年間の充実した生活をやってもらうためには、こういったソフトあるいはハード面で具体的に要望といいますか、教育委員会のしっかりした骨子を出していただいて、それをまた基に議論を実践を重ねていかなければ、やはり地域の合意というのはいただけないと思うのです。

そういう意味で、この最終報告を作るにあたりましては、我々の推進委員会としてはある程度結論は出ていますが、それに対応できる教育委員会はどのようなその対応の仕方ができるのか。具体的な要望で上がってきたものに対して、どうやって答えを出していけるのか。

その辺もじゅうぶん、もう残り少ない議論だと思いますが、じゅうぶんに行っていたきながら、最終報告にさせていただきたいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

その辺のところはじゅうぶん頭の中に入れて最終報告を作り、そして会議の冒頭で言いましたように、県教委事務局は実施計画を作るときに、じゅうぶん地域のコンセンサスを得ながら実施していくということをお願いしていくべきだろうし、望みたいことだと思っております。こんなことで、お願いしたいと思います。

（中沢委員）

この最終報告をまとめていく中で、この項目でいうと5ページの最後のところに関係があるんじゃないかな。実施計画策定に向けてということに関連あるのかなと思うのですが、要するにこの計画を、この委員会とすれば、いつから行うのが妥当なのかという、その辺は論議する必要ないのでしょうか。

県教委の考えでは19年度というのは出されていますが、ここまでずれ込んできている。そしてまだいろんな地域の意見がある。そういう中で、19年度がいいのか、もう1年送って20年度のほうがいいのかという辺を、あまり向こうへ送ることはできないでしょうが、学校の今現在の、生徒の中にも、かなりいつからやるんだろうか、親からもいつからやるんだろうかという、そういう動揺もあるんですね。

だからこれは、少しここで論議をしたほうが私はいいかなという気がするんです。

（飯島委員長）

私はここで論議する必要はなくて、当然先ほど荻原委員からいろいろ要望書、その他いただいている中、これをじゅうぶん加味しながら、県教委が実施計画を立てるときに考えていただければいいことで、私たちが「いつからしろ」ということは、はたして決める必要があるのかなと、そんなことを思っておりますが、どうでしょうか。

ですから私たちは真摯に報告書を制作すると。そのように思いますが、もしほかにご意見があればお願いします。

（佐藤副委員長）

私も委員長と同じ意見でございまして、この委員会がそもそも発足するときに、決められた期間内に我々が最大限の知恵と、情報を収集し、限られた最大限の努力はすると。そして答申はすると。こういうことを、ある程度確認して始めたわけですね。

それで、我々のこの答申というのは、ある意味ではかなり重要かもしれませんが、はっきり言ってこれで最終ではありません。私どもは私どもの使命を果たす。そしてその中でまた、しっかり執行していくのは、次のステップです。私はそういう経験がございまして、皆さんご存じだと思いますが、子ども未来センターというのは私が中心で何年か前にやりました。

もう入札するところまでいって、その日にあれは確かだめになりましたよね。知事が代わりましてね。そういう中で、これだってこれからどういう形で、どういうふうに進んでいくかというのは、私どもの手が離れた時点で決まることであって、ここでいついつまでに、1年延ばすとか、2年延ばすというような要望は出しても意味がないと私は思います。

限られた範囲で、ここまでぎりぎりまで議論したわけですから、この先このメンバーで何をこれから新しく議論していくのですか。

私はこの中で、この出していただいた中で一番大切なことは、転換にあたって委員会でどういう注文を付けるかということ、今日しっかり出して、そしてそれがしっかり守られるかどうかということはある程度担保する。その辺で十分ではないかと私は思います。

（原 委員）

今論議になっている問題についての取り扱いについてのみ簡単に触れますが、この問題は例えば総合学科に転換するとか多部制・単位制に転換するとか、そこでこれからいくつかの条件を付けたり、今のお話のように出るわけですね。

その際に懸念されることが出てくると思うのです。議論としては、そうするとおのずから、そこにかかわって、例えばこれだけ学校を転換するのに時間は心配ないだろうかという懸念が出てくるかもしれないですね。そこで1つ1つ判断していけば、おのずからこの問題については、あらためて項目を立てて議論するということではなく、処理できていくのではないかと思います。

（西村委員）

私も、佐藤委員、原委員と同じ意見です。

我々はこの席である程度議論をして、まさしくどういった理由づけで我々はこういう形にしたのかというのを明記し、「このようにしてほしい」と我々が要望を出し、あとは県教委がそれに対してどういう判断をやっていくのか、それを我々がよくウォッチをしていくということが必要だと思っています。

我々は例えば、どこかの学校がある学科に変わるとなると、やはり県教委のバックアップが必要ですよ。こういうこともしてほしい等の要望を出します。そうすると、多分県

教委側としてやる時期が、おのずと1年になるのか、すぐその学科をやるのか。今ということになりますと、それは我々がウォッチしていけばいいと思っておりますので、今の委員長のご意見に賛成です。

(和泉委員)

先ほどからの意見を聞いていると、私自身がこの会に入って、あるいは長野に十何年間お世話になって感じていることのひとつは、やはり県教委に対するひとつの不信といった言葉に語弊がありますが、担保するというのをこの会議ですって言ったことなんですね。

コミットして宣言したら、透明性を持って学校の順番ぐらい出るぐらい評価をして表に出せばいいんですよ。やっぱり、努力している人を、私は評価してあげたい。

それから努力していない人が、いたたまれない気持ちになって活性化する組織をつくる。私は担保するという言葉は「委ねて」いるからいけないと思います。これを公開制にして、透明性のある組織にして、だから今回のそれぞれの委員会の委託を受けたら、県教委は県民あるいは社会に向かってコミットして、その計画をやりおうせるという責務と、それを担保だと思っています。

そのところが過去の改革の中で、非常にグズグズになっているんじゃないかなというのは、これは私個人的な取り方です。だから今双方から、非常にそういうことの不信感の中で担保したことが守れないとか、そういう不信の念があるように思っています。そういう意味合いで、今後これを運営していくとき、担保したことはある程度はルール化して、そして定期的に公開して、そしてそれを社会の評価を受けると。そこにまさに、私は高校改革が、加速したり、あるいは修正されたり、ひとつの道しるべのような気がするので、このところをしっかりとやっていくということを決める。

そうしないと、この時間がいいか、納期がいいか、中身がいいかということは、すべてをパーフェクトに保障するものでもないし、むしろ12月14日信濃毎日の記事で、箕輪工業の平沢会長が言われた中で、非常にやっぱり感激しているんですが、かたくなに否定するのではなく、いかに魅力ある学校にしていくかが会議の使命と。否定だけじゃないよと。

それから全国一の多部制・単位制にしたいと。むしろ危惧することよりも、全国一にするにはどういうことを実行していくか、どういう中身にするか、どういう運営をするかということにエネルギーを費やしていると、こういうところ。

それから多部制・単位制は生徒のニーズに応えられる柔軟性のあるシステムで、前向きにとらえていく必要があると。まさにこれが、やっぱり我々が魅力ある学校をつくるときの基本ベースにあるべきことなんで、懸念することと確認しなきゃいけないことはありますが、そのことを運営の中ではっきりと、しっかりと、やっぱりアウトプットしていただくということが、一番大事な約束だと私は思っています。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

それでは、大方のご意見は。別に私たちが改革実施時期を明記することじゃなくて、議論の中でそれは述べることは述べていくということではしていきたいと思っております。

それでは大方の骨子はこんなような形で進めていき、また皆さんのご意見の中で、ここはこうしたほうが良いというところは訂正をしながら進めていきたいと思います。もしご意見がありましたら、その都度いただきたいと思います。

それでは、会議が始まってから 1 時間半になりました。ここで 10 分ほど休憩を入れたいと思います。よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは、休憩前に引き続きまして、委員会を開催させていただきます。本来は開催の冒頭に欠席の芹澤委員の報告をしておかなければいけなかったのですが、体調を崩されて今日は欠席ということで、だいたひ委員会のほうも容態の悪いなか出席していただいたんですが今日は欠席でございます。ご理解をいただきたいと思います。

それでは先ほどの報告書の原案に沿って皆様方のご意見をいただきたいと思います。1 枚目のペーパー 2 の(1)県教委から検討を依頼された事項について、もし小林委員の続きでご意見がありましたらご発言いただきたいと思います。

ご意見はどんどんいただいたものを今事務局に記録するように言っておきました。そして私と副委員長で取りまとめて皆さんへご提示するそんな形を取りたいと思います。

なお今日十分ご意見が出なかったものは、事務局に出していただいて、それを私たちの方にいただきまとめるという形で最後のところは、決めたいと思っております。それではどうぞ。2 の 1 のところで小林委員からいただいた続きのところでご意見ございましたらどうぞお願いします。

(佐藤副委員長)

それからずっと順次進めて行くにあたって、特に一番大切なところは私の考え方ですが、転換にあたってというこのところを、しっかり注文といったら何ですが、この委員会で決定していくことが必要であろうと思います。

いずれにしても 1 の丸子実業高校を総合学科に転換するという、これについてのいきさつは次のところで簡単に述べるとして、次の転換にあたってに関してはこれから新しくこういう学校をつくっていくんだという、その進め方をしっかりこの委員会で議論して、しっかり先ほどの和泉委員と原委員のお話にもありましたが、今までのいきさつからいって、本当に県に対するあるいは県教委に対する信頼が非常にないんですね。お聞きしたあとは、本当に我々の意見がどのように通っていくのかということが私も長いこと県にいた時の経験から不透明です。いつまでも吉江さんがいるわけじゃないし、米澤さんがいるわけじゃない、こういう中で私も非常に苦しい思いもしたことがあります。

そういう中でこの委員会で決めた変換にあたっての結論をしっかりとここで担保する必要がある、ただ単なる担保じゃなくてという話は全くその通りだと私は思います、委員会としてのこれをしっかり実行してもらうということは、ここに決議していくことは必要です。

そういうことで私は提案します。転換にあたって以前から申し上げていますように、「設置検討委員会」的なものを立ち上げていただく、その中で少なくともこの推進委員会の委

員長あるいは関係する学校の地域の委員さんにも出ていただき、今度こそは地域の人にも出ていただいて地域の意見もしっかりと入れて、しっかりした学校をつくっていただく。

こういうことを私は具体的にはよく分かりませんが設置検討委員会的なものを立ち上げていただいてそこでしっかり議論していただき地元の意見も聞き我々がここで議論した中身を検証しながらつくっていくとこれもひとつの案として私は検討委員会的なものをつくるのは必要だと思います。

答申したままでは、正直言って信用できませんので、すみませんね、私も今までの経験上そうですから、よろしくお願いします。以上です。

（原 委員）

厳しい意見だと思いました、と同時に私はそれがそれぞれの該当するところに出てくるのかこんなことを発言したいのです。

今日開催直後に事務局からいくつかの資料の説明がありましたが、実はこの委員会に大変厳しい抗議が寄せられている問題ですね、とりわけ望月の転換や、野沢南の転換だとか該当校のそれぞれの守り発展させる会ですとかそういうところから文面を目で追っていきますと大変厳しいおしかりが出ているわけですね。そうするとどういう形で進めていっても、一番の根本的な問題はその該当校もしくは地域等々との合意だと思うのです、これを抗議書が来ているのは見過ごすことはできないと思うんです、地域との合意をいかにするのか、幕引きをする際に転換にあたってどうのこの、佐藤委員さんの厳しいご指摘もその通りだと思うんですが、更に加えてその私が申し上げていることが重要であると思うのです。

（遠山委員）

それはもっともですが、ではみんなの意見を全部聞いてまとまると思いますか。

これについては、これからは県教委にもしっかりしていなければだめですよ、今度県教委の委員長になった方もなんだかんだわからないことを言っている。ちゃんとした姿勢を出さないからみんな動揺して大騒ぎしている。会議を沢山持ったところで、ただ大騒ぎして混乱するだけです。ただ騒ぐだけなら、二度と改革の問題を持ち出してほしくない。

この改革は大変な問題です。もっと真剣な問題ですよ、ひとつの学校が消えるか、又は大きく変わっていかなければいけない問題でしょう、命がけの問題ですよ。我々14人が言わせられて、一定の方向を出して、あと県が、命がけで良くするようにしなくちゃいけないですよ。何故我々が15回も16回も会合を持ったのか。そこをしっかりと考えてほしいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。私たちの思いを遠山委員は言っていたいたと思っています。我々もいい高校になってほしいからやっているわけですから、これは傍聴席に向かっていっている言葉ですが精一杯やっております、その点だけはご理解いただきたいと思います。それでは続いて皆さんからご意見をいただきたいと思います。

それではこれは別に戻ってもかまわないことですから、先へいきます。2枚目です。

第5区丸子実業高等学校総合学科に転換についてです、転換にあたっては先ほど佐藤委員からもございましたが、もし何かご意見ございましたらどうぞ。

それから転換後のイメージというのは委員会を進めていく中で、委員の皆さんからでたものあるいは今回事務局で丸子実業からも情報を収集した物もいくつか入っております。そんなことで転換後のイメージのところはご理解をいただきたいと思います。

（太田委員）

総合学科単位制については、私は実業高校が転換するということには、大変問題があるということで反対申し上げていたのですが、これはもう何回申し上げてきたのもう一度確認してほしいのは、専門性を極めていく実業高校をどうレベルを上げるかというものが優先されて前提にあってそれが論議されたところで方法論として多部制単位制の導入という順番だったのかなということは何回も申し上げていることでございます。

民間企業から見ると専門性を持った高校卒業生がほしいわけで、普通高校を出た方はパートや派遣社員に取って代わられてきていますので、我々はそのところをもっと重視していきたい。総合学科という方法は進学校の方法論としては良好な方式ですが、専門性を高めるための実業高校の育成とかレベルアップにはつながらないと私は判断していますのでぜひ次のステップには長野県の実業教育、実業高校をどうすべきなのかということを経ひひとつ考えた方針を出していただいて、動いていただきたい。

私が常々考えているのは各地区毎に実業高校の専門性を高めるようなセンター的な高校をつくってそこで徹底的に時代の動きや技術開発の動きを情報収集しながら民間からも先生方を導入しながら、やはりレベルを上げていったかたちのものがあってそれをフレーム化したこういう措置を取っていただきたいと思っております。以上です。

（飯島委員長）

ありがとうございます。ほかにどうでしょうか。

（原 委員）

丸子実業の総合学科転換の議論ときにもいくつか申し上げたことを思い出しながら、ぜひそれに対しての十分な配慮をお願いしたいという観点から申し上げます。

一番の問題は県下第1号の塩尻志学館が総合学科としてスタートした、今度の丸実の場合には他地区でもそうでしょうが、いわば2番目になるわけですね、そして1番の総合学科はいろんな点で県行政の手厚い保護の元に進められたということも事実だと思いますね。

従って丸子の転換についてもそれに劣らない施設・設備あるいは教員配置これについての丁寧な対応が求められるということだと思えます。そしていろんな系列ということが総合学科には考えられると思うのですがこれについては基本的には学校の校長以下学校の教職員がもちろん教育委員会のサゼスチョンあるいは指導などを受けながら討議しているわけですから、あまり時間的に短期間に急がせてやるということではないわけですね、本当に丸実にふさわしい地域あるいは卒業後の動向そうしたことも見据えてどういう系列がいいのかということについて上記の検討を要するそういう中からスタートしていくこと

が望まれると思います。

（飯島委員長）

よろしいでしょうか、ご意見がなければ先にいって、また戻ってもかまいませんからご理解いただいて次にいきます。今回、5 区の他の高校の件でご意見がありましたらお願いします。

私から発言させてもらいます。小林委員にはちょっと耳が痛い話かもしれませんが、東部高校がちょっといつも定員が充足していない、そのところをどのように魅力作りをするかこの辺のところは大事なことだろうと思っています、非常に利便性のある沿線にありながらそれが充足していかない、何か魅力づくりを考えていく必要があるのだろうと、その辺を発言していただけますか。

（佐藤副委員長）

委員長の話の中にもありましたように、やはりこういう学校は実際にあるわけで、このためには私も前から言いましたように大規模校の学級数の見直しをもう少ししっかりするということは必要だと思います。そのことによってそこでオーバーフローした学生がどういう形でどこへ行くかということは、予測がつくわけです。

大規模校は9学級か8学級ありましたか、そういうふうにダイナミックに学級数を見なしていくそれが必要、均等に足腰がしっかりした学校をつくるということは必要です。その突破口としては学級数を見直す。もう物理的にもう流れますからオーバーフローすればね、そういうことをぜひお願いしたい、以上です。

（飯島委員長）

この件につきましては多少反論もあろうかなと思いますが、今、私立高校がなかった時代にはその可能性もありましたが、私立高校があちこちに設立されている現今果たしてオーバーフローした子どもたちがそちらに流れる保証はないと思います、やはり魅力ある学校づくりこれにつきるだろうと思います。

数を減らしたらそちらに流れるというのはちょっと難しい気が私はしております。これは私見であります。さあほかにご意見下さい。

（小林委員）

前に3年生のアンケートですが、そこでいうとほしい学科、1番では体験実習ができる学科がほしい。2番目にコンピューター情報、3番目にスポーツというのがありますが、いずれにしろ体を動かしてできると多部制・単位制もそうだと思いますし、総合学科もそうですが、十分に子どもたちが満足できるような場がほしいと思います。

それからコンピューター話のときに出てきました進学コースというのが大事になりはしないかという話もありましたが、そんな点も含めてできるといいなぁと思います。それから国際学科、国際的ということで英語関係なんかも生徒も興味関心を持っているようですので、どの程度組み込めるか、今やっている授業の内容をふくらませる程度でいいのかわかりませんが、多様な学習ができるという場も広げればよいと思います。

それから一方では、基礎から学ぶということで小中学校からもっとがんばってもらおうというのが大前提になりますが、そういう生徒さんがいるということも含めて、先ほどは少人数ということで話がありましたけれど、基礎から学べるようなコースというのが学科とというのがほしい気がします。

（遠山委員）

佐藤先生のお考え、これは捨て置けない、ちゃんとやらねばいけないことだと思います。

例えば染谷丘高校は1学年で、300人近くですか6学級、長野県の学校は一学年2学級やっとのところもあれば9学級と言う学校もある。しかし東部高校などを生かすためには、そういう学校の学級数を多少減らさなければ、物理的に難しいと思います。そんなに大勢いなくても優秀な子どもは育つと思います。上田高校には今回減らして頂き感謝していますよ、あのように校長先生が理解してくれてね、東部高校という中間にある高校に栄えてもらって、私にいわせれば一番いい場所ですよ、ぜひ考えてもらいたいと思います。

（飯島委員長）

はいありがとうございます。よろしいでしょうか。

それでは次の3枚目のペーパーにいきたいと思います。現在の全日制11校を9校に統合していくというご意見、ほかの蓼科高校、臼田高校の統合あるいは野沢南高校多部制単位制に転換していくこと全部かかわってまいりますからどうぞ、第4の1・2・3は一緒にご意見いただいても結構だと思います。

（佐藤副委員長）

この3ページの話ですが、これは特に私にかかわる話というわけでもありませんが、私が望月高校と蓼科高校の統合の話の時も私が主張したんですが、この中で最初に統合にあたってひとつの検討していく組織をつくってほしいという話をした中身は、望月高校・蓼科高校の統合は大きな改革だったと思うんですよ、丸子は地域も受け入れるという話の中で「なるい」転換だった、この望月高校・蓼科高校というのは非常に難しい問題が含まれていると私は思います。この中で特に先ほど遠山委員も言いましたが、教育委員会が強力なリーダーシップを持ってこの統合にあたっての、先ほど私が言いましたように設置検討委員会的なものを立ち上げていただいて望月と蓼科の統合が全く50:50の形でできるまでしっかりやっていただきたい、そういう組織がないと地域の人がでていく抗議書等がこの委員会へ出ていますが、こういう場所をつくっておかなければ抗議文を出しただけで、「見ました」と言うだけ。この委員会の中でこれだけ苦しい激論を戦わした結論が生きてこなければ地元は協力出来ませんよ。そういう中でこういう学校をつくっていくんだみんなでつくろう、こういう土壌を教育委員会の強力なリーダーシップでそういうものを立ち上げていただきたいと切にお願い申し上げます。

ただ委員会だけだとさっき言ったように、「あの時言ったね」だけでは困っちゃうわけです。そういう中でしっかりそういう組織を立ち上げてもらいたい。県教委の中で今日ぜひ要望致します。それからこの委員会でもぜひご賛同いただきたいと思います。

(中沢委員)

今佐藤委員さんがおっしゃったことは私もその通りでよいと思いますがこの第6区について一番上の括弧の中に受験生の全日制11校を9校に統合していくというのがこの6区の中にボンと出てきているんですね。もともとは一番最初の推進委員会の頭のほうに第二通の全体の学校が17校であってそれで先々を見ていったときに生徒数の変動によって15校に減らすというそれについては妥当性を書いておき、結果的には第5区でこれを受けて「こうなったんだ」という形になっていかないと高校がボンと出るというのは初めからねらっているようなそんなイメージがあります。そこは誤解を招くと思います。

(遠山委員)

実はもともとそのための改革であり、それを狙っていると思います。

中沢委員さんがおっしゃったようにするならば、それは改革ではないと思います。それならば、全部ご破算にしてやり直した方がいいですよ。

それぞれがすごく痛みを伴っている、結局何だかんだいって改革は進まないですよ、そのことを早くいえば、今回の「改革」はどちらかといえば「教育のレボリューション」ですね。改革なんていうものではなく、こういうやり方は「革命」ですよ。

だから私は県がちゃんと言ったからには責任を持ってしっかりやれと言っているのはそういうことです。人が変わったから何が変わったからなんてそんな問題じゃない。

これは大変なことですよ、私は今の佐藤先生がおっしゃったとおり本当にこのような中で合併ひとつのことを考えても、これは大変なことです。

ですから野沢南の多部制・単位制についても、今までと全く違うことですから、ここで今まで一生懸命に議論したことを私達委員が報告書として提出し、あとは教育委員会がしっかりやるということではないですか。あと1・2回の会議で決めなくてはいけないところへきています。この報告書に様々な付帯事項を付けるのか等も含めて、県で考えてもらうということではないでしょうか。

高校改革というのはそういうことではないですか。ですから、私どもの場合、話し合っただけでやれば本気になってやればできるのですが、皆が涙をのんでいるではないですか。そのところを考えてもらわないと、「委員会」というような委員会を設け、ただ話し合えば良いと言うのであれば、それでよいのですが...

(飯島委員長)

ありがとうございます。

中沢委員のおっしゃるとおり、これはここに入れる項目ではないかもしれませんがね。これは1枚目のペーパーの中に、1の1の中に入れていくことだろうかと思っております。また、その件につきましてもご意見をお願いしたいと思います。

(原 委員)

今のお話で、どこか別の場所にいくということのようですが、それはそれとして、今の中沢委員さんの発言に続けたいのですが、これは結論的に言ってしまうと、論議の中で出されてきた少数意見もここに付記をしていただきたいということでもあります。それは、特

に佐久においては何度も私や中沢委員、その他の委員からのご指摘があったように、もともとは小規模の学校、地域高校が4校もあり、職業高校の北農も小商も小規模なのです。半数以上の学校が小規模なのです。それを県のたたき台は、いわば機械的に計算をして、平成31年にはこれだけのちっちゃい規模になってしまうと出てきたわけですが、その旧6通のいわば歴史的な特徴ということについて、やはり十分配慮するべきであったということが何度も主張されましたから、そのことについては、この項目がどこに移ってもいいですが、明記をしていただきたいということでもあります。

（飯島委員長）

はい。わかりました。ほかにご意見どうぞ。

（和泉委員）

3ページに、私はこの会議で場合によっては、小、中、高、一貫のシステムでもやって改革をやってもらいたいような意見を言いましたが、その手始めには、3ページの総合、これは多部制になろうと、普通高校になろうと基本的なことはすべて一緒なのですが、やはり、小、中、高で定期的な打ち合わせ等はやっていращやるという話も聞いていました。

要は、改革やレベルアップだとか、そういうことについての打ち合わせになっているのかどうか。あるいは個人育成、人材育成という形でなっているのかどうか、そういう意味合いではプラットフォームの話もありますし、地域と連携等のした学校づくり、それから、地元中学との連携、学習活動、クラブ活動と並記してあるのですが、私は、本当はもっと、小、中、高一貫して、やはり人間形成を含めて、学力からやるというイメージで発言していましたので、ここのところは単なる連携とかそういう言葉ではなく、もう少し中身があるような運営で、具体的にはもうやられているのですが、ではどのように改革するのか、地域というか学校のつながりをどうしていくのかが、具体的に中身を出して運営されてほしいと思っています。

（佐藤副委員長）

今の和泉委員の話ですが、現在の段階ではそういう地域との連携というのは、全然行われる土壤ができていないと思います。だからこそ、私はこの新しい学校をつくっていくにあたって、そういう土壤を、そういう機会を、自分の意見が言える機会をつくってくださいと言っているわけです。

その統合のイメージというのは、むしろそういう組織をつくったところで、しっかりこれを参考にして新しくつくっていけばいい話なのです。むしろ地域に密着した、そういう話を十分その中に導入して、みんなが協力してできるような体制づくりをしてください。こういうことを切にお願いしているわけです。私はこれができれば、統合は必ず今よりもいい学校になると思うわけです。そういう中で、それがしっかりできないと、例えば、私の思惑でこういうことを言っては語弊を招きますが、例えばこのまま、望月と蓼科が統合、あるいは文面どおりいきますと、望月の統廃合というかたちになった場合に、望月地域のこのいいイメージが、こういうものがその新しくできた学校に反映できるかどうか保証で

きないです。ですから、私どもが決めたこの統合改革というものは、場合によっては禍根を残すと言いますか、地域の中に一体感というものが生まれてこないようなつくり方をしではまずいと思うのです。その中で、私はしっかりそういうものが論じられるような場をつくってください。場をつくっていないと、どこに持っていったいいのかわからないわけです。こういうものができたって、これを県教委にもっていったって、受け取りました、どうになりましたというようなもので、そういう場があれば、議論ができるではないですか。そういうものをしっかりつくっておくということがとても必要だと思います。これがないと、この会議が終わればもっていき場がないです。ターゲットが全然ないわけですから。ですから私はそういう場をつくるということが必要だと。土壌ができれば、イメージはそこでしっかり議論してもらえれば、おのずとできると、ということだと思います。

（遠山委員）

それは非常に理想だと思いますが、地域に任されても困ります。結局、地域で片付けることになりますよね。地域の者が集まって言い合ったって、本当にそれぞれの主張がまとまらないので、私は言っているのです。これだから、県教委にしっかりやってくれと、そんなお互いに言い合ったって、もめ合うきりで、どうにもならないのです。

蓼科と望月の卒業生で議論しあうだけでどうにもならないと思います。その後禍根が残らないかと言えば、これは禍根が残ります。私はこういうことは避けたいです。

私もはっきり言って望月高校の卒業生です。本当のことを言えば、望月がなくなるということは、本当に我慢できないことです。本当ならもう改革などしたくないです。人ごとではないです。そのことを、私も望月を卒業したということは、今まで言わないで来ましたが、泣きたいくらい切ないです。後始末を地元でやれと言われても、はっきり言って私はできません。

（佐藤副委員長）

ちょっと意味がちがいます。

遠山委員は誤解されている。

誤解しているもので私が簡単に説明しますと、私は地域にすべて投げ出して、これを解決してくださいと言っているわけではなくて、県教委が強力なリーダーシップをもって地域から出た意見をまとめてくださいと言っているのです。これは、そのまま投げ出されたら、今、遠山委員の言ったとおりです。

遠山委員と望月の代表が集まったって、お互いにそんなことはわかりきった上で私はそう言っている。つまり、県教委がそういう組織をしっかりつくって、その中でやってくれと、こう言っているのです。ですから、遠山委員は私が言っているのを誤解しているのです。遠山さん、地域にまかせると、こう言っているわけではなくて、この意見はむしろ地域にまかせたら発散してしまいます。そうではなくて、まとまるかたちの組織をつくってくださいと、こう言っているわけです。

おわかりになりましたか。

(遠山委員)

難しいとは思いますがね。

(飯島委員長)

事務局で手を挙げました。事務局どうぞ。

(吉江高校教育課長)

いろいろ、今、ご発言をいただいております、ある意味私ども県教育委員会が頼りないといえますか、信じられないというようなご批判も含めてのご意見だったかと拝聴しております。

ただ、一つ申し上げるとすれば、これだけのものを平成 15 年からスタートしたというのは、今までうんぬんはさておかせていただくとして、県教育委員会を挙げての事業ということで、そういう意味ではかなりの決意を持っているということとはご理解いただきたいと思っています。

また、佐藤委員さんの方でいただきましたような、実は「委員会」という言葉がいいのかなというのは一つ心配しております。と申しますのが、ある意味、遠山委員さんのご心配の旨と同じように、例えばこの 17 回にわたって、推進委員会で議論していただいて、一つの方向性を出していただきました。その方向性を、またもう一回やり直すようなかたちになっては、これはいけないと考えています。ですから、そういうような形にならないという位置付けで、当然、両校との連絡、調整の場というのは必要になりますから、そういうような位置付けのものを、私どもも一緒に、いろいろな形の場面で、そのような場面が出てくるといようなことであれば、それはもちろん当然ながら必要なことであろうかと思いますが、なにに委員会とか、先ほどもお話をさせていただきましたけれども、そういうようなことで、例えばいろいろな方々、もう特定の、例えばこの推進委員の皆さまも含めて、入っていただいとかなんかというかたちになりますと、あたかも「第二」推進委員会のようにになってしまうかなという懸念がありますので、その辺は、私が申し上げたような意を含めた内容でぜひご検討頂ければと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。事務局のご意見を含めながら、一つ報告書の中に検討していただきたいと思います。ほかにどうでしょうか。

(原 委員)

各項目ごとに、順番に発言をしていこうと思っていたものですから、先ほどは総数問題で旧 6 通、佐久地域の歴史的特徴について付記してほしいと申し上げた話で、この 2 番の望月、蓼科統合問題については、新たな学校とするという表現になっているようです。これは思い起こせば、非常に印象的ですが、佐藤委員さんが強力に主張されて、一校、一つをつぶすのではないと。一つをつぶして、一つを生かすと、そういうことではなくて、新しい学校をつくるという、そういう点に力点を置かれて発言されていたことを思い出します。その際に、名前も変える、あるいは場所も変えると、そういうことも視野におさめる

と、こういうご発言でした。そこの最後の部分というのが、実は議論されていないところでありまして、例えば、この３ページの資料でいきますと下の方に統合後のイメージで、地域教育プラットフォームからの支援という、そういう項目がありますが、これは望月の地域にこの間精力的につくられてきた学校サポート組織なのです。ですから、これをほかのところに簡単にもっていくということは、もちろんできないわけです。

それで、元に戻りますと、新たな学校をつくり校名を考え直すと、こういうことからいくと、その２行目にある、その際、蓼科高校の校舎、校地を活用することについては、実は議論されていないと思うのです。学校要覧の資料をこの間見た中では、望月と蓼科の両校の校地、それから校舎などでいくと、確か望月の方が広く、校舎もそうだったと考えています。そのように読み取ったのですが、それがもし間違いなければ、そのことも含めて、校舎、校地をどうするのかということは一回議論する必要があるということを申し上げたいです。

（飯島委員長）

検討事項のほかに、新たな提案というような形になりますが、この項目を議論しておりますと大変なことになってしまいますから、これは「その際うんぬん」というのは削除しましょうか。

はい。その方がよろしいかと思えますから、これは取りあえず新たな学校とするということにして、その際以下は削除というかたちで検討に入りたいと思います。お願いします。

（遠山委員）

望月とか蓼科とか校名が出ましたが、新しくどこかへ学校をつくるのですか。それならいいのですが、蓼科と望月を一緒にして、学校をつくって、校名も新しくして、校舎の新築には５０億ほどかかるそうですが、それが出来れば本当に全て解決です。ただ言葉の上で統合などと立派な事を言われても、それぞれの地域の考え方の中に入ってくれば、そんなに簡単に解決できる問題ではないです。

新しい学校をつくって、そして名前も新しくするなら、望月も努力していますが、蓼科高校も、相当努力してきています。その中で、私どもがあれこれ言われても、どうにもならないです。学校名だなんだと言われても。あと、地元任せで、結局そういうことになってくるのではないですか。地元で喧嘩することになってしまいますね。県で持ち出したことが元になって、今まで親しく、仲良くやってきたのに別れてしまう。そういうことを考えると、それほど簡単なものではない。もしやるなら、学校を新しくして、別のところに建てて、両方がうまくいいところに新しい高校を建てる、そうできるならそうやってもらいたい。

（佐藤副委員長）

心情論はよくわかりますが、この委員会というのはやはり、データなどに基づいてやらないと、そういうのはレアケースでありますから、取り上げる必要はないと思います。そういう中で、先ほど原委員が発言された、その際以下これは議論されていないわけです。ですから、これはどうして書くことができるのですか。これは答申ではないのですか。です

から、私は、このところは削除した方がいいと思います。

（飯島委員長）

事務局の方で、その際、蓼科高等学校の校舎を利用することが、決定はみてないが、議論して、考えてほしいという意向があるようです。確かに、新たな学校をつくるというかたちになりますと、遠山委員から出ましたように、では、どこかにつくるのかという話になってしまいます。校名とかいうことは可能でしょうが、校舎、校地を活用してという話は、確かに委員会の中ではだいが出てはありました。ただ、こちらを使うという話には至っていなかったような気はいたします。その辺のところで、地理的なこと、5 キロくらいの距離だと記憶していましたが、ご意見いかがでしょうか。

（小林委員）

話し合いの途中ではこのようにはなっていませんでしたが、中身的には、蓼科は丸子との関係や通学やいろいろなことで、私自身の頭の中では、現校地、校舎をイメージしながら進めてきていました。

（西村委員）

県からのいろいろな資料をみると、基本的には望月と蓼科の統合については、統合後は通学範囲等から蓼科高校の校舎、校地を活用していくという形で提案はされていますので、私はそういったイメージでずっと議論をしておりました。

今、小林委員がおっしゃったように、丸子実業との関係等を考えると、基本的には蓼科高校の校地、校舎を活用していくのがベターではないかと思います。

（佐藤副委員長）

私もそのように理解していました。ただ、これは答申です。答申の中に入れて果たしていいのかということを言っているのです。私もそういうふうに理解しています。丸子から生徒が登ってくる。そういう中で、やはり蓼科かなと、こういうイメージはあります。ありますが、この答申の中で、そういうことをきちっとうたっているのか、そこを問題にしているわけです。

（飯島委員長）

はい。その辺についていかがでしょうか。

統廃合の候補案についての、当時の資料では、今、西村委員が発言していただきましたように、校舎、校地は蓼科高校のものを使用するということにはなっておりますが、この辺どうでしょうか。距離的なこととか、子どもの通学している範囲など考えておまして、暗黙の内に、当然なこととして、蓼科の現校地を使うということできておりますけれども、その辺のところ、この中に校地を活用してという言葉を入れる方がいいのか、あるいは、後の意見の統合の中の意見として入れていく方がいいのか、その辺はどうでしょうか。

（和泉委員）

佐藤さんも理解されておられるので、この文章の中に書くことは削除すればいいのではないですか。そうすると、頭の中に皆さんが思っていることは一定ですし、わざわざ文面の中で書くことが問題だから削除したいということが言われているわけで、私は賛成ですが。

（飯島委員長）

議論した内容については、十分夢科の校地、校舎を使うということで議論を進めていますから、議論の経過をみていただくとそれは理解できるのではないかと。この文章からは削除すると、そういう意見です。そういうかたちではどうでしょう。

（吉江高校教育課長）

実際問題としまして、12月に開かれた委員会におきまして、皆さんのお考えの中でそういう議論が進んでいたかと承知している次第でございます。ただ、やはりどちらの校地、校舎を使うかということは、ある意味、重要な要素だと考えております。そういうことから、例えばこの四角枠の中に入れていただく必要はないかもしれませんが、報告書の中には、もし皆さま方がそれについて疑義があるとすれば、再度ご確認をいただいた上で、例えばこの下に「・」がいくつかある中で、後々、例えばの話が統合にあたっては、どちらの校地、校舎を使っていくということとはぜひ書きいただければと考えておりますので、またその辺のところも含めてご検討いただければと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。以上のようなことでありますが、当然、統合にあたってというところに、いくつか要望事項が入ってまいります。その中で委員会のご意見として入れていったらどうだろうということではありますが、私も、そんなかたちがいいのかと思っております。

それではそのようなかたちで、大枠の中からは削除させていただきます。

そのほかにご意見いかがでしょうか。

（荻原委員）

この5区、6区には私立高校が二校、上田西、佐久長聖がございまして、平成18年度の募集をみますと、中学からも入ってくると思いますが、上田西が285、佐久長聖が340という募集がかかっているわけです。こういった学校で、今後10年はこの程度でいくのかなという紳士協定はできているのかなという格好はございますが、平成31年になれば、私立高校とすればそれで生きていくというか、存続できるのかなという部分もございまして、その辺の私立の動向は、やはり、特に佐久長聖におきましては、やはり中高一貫教育という格好でやっていますので、その辺は教育委員会でどういう見通しがあるのか、ちょっと教えていただけたらと思います。

(飯島委員長)

それは、何度か事務局から答えをもらっております。

(荻原委員)

18 パーセントというのがあるのですが、ただ平成 31 年という先をみたときに、そのままいくのかなという部分があると思います。

(飯島委員長)

31 年とだいぶ先のことですが、事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

私どものシミュレーション自体が、今現在の、今荻原委員さんからお話ございましたように、主に公が 82、それから私が 18 というベースでの動きの中で、基本にご提案申し上げております。これにつきましては、公私立高等学校連絡協議会という協議会で毎年幹事会や委員会の折に確認をして、次年度に向けての定員を決めてというやり方をしてございまして、将来的にその動きが全くこのまますぐに永続的にやるということについて、今の段階でお答えは必ずしもできない面はありますが、私どもとすれば将来にわたってこの方向で当面は当然ながら今のやり方でいこうと考えております。ただ、私立の場合、例えばの話が、このご当地の場合に若干定員を上回るような結果的には、合格を出されたとか、出されないというようなお話もございしますが、それは私学全体の中で、例えば 3,950 人という定数を決めて、その中で配分でございますので、これはまた私学の側においての協議が進むということで考えております。ただ、私どもとすれば比率はそういう比率のままで、31 年まで含めて見通してもらいたいというようなことでご理解いただきたいと思っております。

(荻原委員)

傾向とすれば、佐久長聖とすればたぶん中高一貫に全部移行していくのではないかと思いますので、中高一貫のその部分はどのように解釈するのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

中高一貫に移行した場合に、結果的には高等学校の例えば佐久長聖の、いわゆる募集の中の中高部分が増えるという形だと思いますが、先ほど申し上げましたように、高等部分の佐久長聖の定数という意味で考えますと、いわゆる全体の私立の数字の中で移行するという調整が続くと考えております。

(遠山委員)

今の話とちょっと違いますが、上田、小県は約 20 万の人口がありますね。そして公立高校が 6 校です。佐久は、今度合併して 10 万ですね。その中に 6 校ありますね。ですから、蓼高の場合にもどちらかといえば、その上小地区から来ているわけで、今まで望月から向こう(佐久市方面)には、望月高校があるので遠慮して御願いしてきませんでした。

ですから人口から考えても上小の半分 10 万に対して 6 校であり学校の絶対数が上田、小
県のほうが少ないですよ。そういうことも考えて、県教委はこの数字を出したと思います。

どちらかといえばそっち（上小地区）の応援部隊みたいに蓼科高等学校も、そこへ置いて
やるという考え方だと思います。

そうした中で蓼科高校の校地校舎の活用は視野に、入れたのではないかと思います。ち
よっと話が違い、申しわけないですが。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。

ほかにご意見どうでしょうか。

それでは、4 枚目のペーパーの第 6 区の他の高校について、先ほどは 5 区の小海高校の
話がございましたが、他の高校について委員会の中でもいくつか意見は出ました。ここ
では学校名を出さざるを得ないと思いますから、どうぞ出していただきたいと思いま

（西村委員）

野沢南の多部制・単位制についてはここではないのですか。

（飯島委員長）

それは先ほどまで続けていったんですが、もし野沢南の多部制・単位制の転換につ
いてでしたら、それを先に。何かご意見がありましたらどうぞ、いただきたいと思いま

（佐藤副委員長）

これは、先ほどの蓼科、望月の統合もそうですが、この野沢南の多部制・単位制の転換、
これこそというか、これもかなりしっかり私が先ほどから申し上げましたように、はっき
り言って、やっぱり今まで見てきた高校は参考になりませんね。

なぜ参考にならないかという、定時制の問題とか、地域の利便性の問題だって必ずし
も解決されているわけじゃないわけですね。こういう中で、やっぱり多部制・単位制にこ
れから転換して発展させていかなければいけないわけです。くどいようですが、本当にこ
こもどういう形のものをつくっていくかということを、今度こそ本当に地元の意見をしっ
かり入れながらなおかつ最後は県教委が強力なリーダーシップできちっと決めていく。

それでやっぱりあのときはこんなわけのわからない学校に転換されてしまったけど、今
考えてみると非常にいいんだというような形のものに知恵を絞る、全員の知恵を絞ってや
っていくということで、私は転換に当たってと、くどいようですけどこのところに研究
機関、つまり検討機関をしっかり入れなさいということをさっきから申し上げているので
すが、これもはっきりした答えが返ってこないんですが、これを入れないとだめですよ。

この委員会から手が離れてしまって答申しちゃった後どうするんですか。今までここ
に出てきたいろいろ要望書とか、抗議文ですか。こういうものをどうやって組み込んでい
くかという場をちゃんとつくるということを、ここで明言していただかないと、この望月、
蓼科にしる、遠山さんがいみじくも言いましたが、地元に応えられないと解決でき
ない、全く私はそのとおりだと思います。

ですからもちろん県教委がしっかりそこへ入って、そしてこれは両方に任したときは、もう本当に意見百出、もう本当に発散しちゃっていい方向へ行かないと思うんですね。ですから県教委がしっかりした哲学を持って、方向性を持ってリードしていただきたい。そのときには、そういう組織を必ずつくって、地元の方が参加できるものをつくっていく。こういうことです。

最後は、ガヤガヤしても、これは最後に私が言っているように、県教委がしっかりした方向性を出していけば、それに従ってやっていくということじゃないでしょうか。くだいようですけど本当にこれは。これはほかの転換後のイメージというのは次の問題ですよ。その前のところ、これをしっかりつくることが、この委員会の任された最後の使命じゃないかなと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

蓼科、望月の統合に当たっての意見であります。

（小林委員）

まずどのくらいかけるかはともかくとして、金をかけていただきたい。ああ、なるほど変わったなとなるような方向でやっていただきたい。

前にもありました、食堂がなんていうこともありました。見に行きましたフレックスですが、くつろげるスペース。学校へなかなか意欲を持ってこれない、やっどこ来ているというような生徒さんたちに、くつろげるような部屋、あるいは寝そべることができる畳敷きのような部屋。生徒たちの登下校の掌握について、パソコン、あるいは何か一括掌握できるようなもの、最初に金をかける場面は、惜しまずしっかりとかけ、後で追加といっても無理ですので、そんな点お願いできればと思います。

また、地域との交流、それから講師、あるいは受講生との市民との交流ということもありますが、それは二の次ですけれど、どういうイメージでどういうものをするかというハード面、それからソフト面とやっていただければありがたいと思っています。

（荻原委員）

もう1回か2回で、最終答申になるわけですが、その後の道筋については県教委は示してごさいませんね。どういった格好で、具体的に。本当に佐藤さんの言うように検討委員会、建設委員会をつくってガチャガチャやらないと、もう間に合わないと思いますが、その道筋を示さない、あるいは県議会、多分その統合なんていうのは条例だからちゃんとやらなくちゃいけないんだろうし、その辺の道筋というのは、どういうふうに考えていらっしゃるのでしょうかね。

私はこの答申について担保は求めたいわけですが、あるいはまた評価をしたいわけですが、そういった教育委員会はこれからどんな格好でこれを具体化されていくのか。そういう説得力がないと、やはり私としても最終答申という格好で言いつ放し、やりっ放しでは、ちょっとまずいと思いますので、次回でも結構ですからそういった格好できちんとしたスキームなりを、ちゃんと示していただきたいと思います。

ある程度相当な結論をここで出してしまったということもございますので、今後についてその枠組みはちゃんと示していただいて、何回も言うようですがいろんな団体から来ている要請、抗議、その他についてもちゃんと答えるべきだと私は思っていますので、その辺につきましても、どういう考えでいらっしゃるのかお願いしたいと思います。

（飯島委員長）

わかりました。

今後の方向につきまして県教委は、県議会やその他で述べておりますし、それから新聞紙上ぐらいしか私たちは知っておりません。ですから一度、荻原委員が求めておりますから、次回で結構ですから事務局で、こんな方向で、今後は進めていくんだというものを示していただきたいと思います。

当初私たち委員会が発足したときにいただいたタイムスケジュールと、また変わっている部分があればご説明いただければと思います。

（原 委員）

野沢南の転換については、私はまた議論を蒸し返すという意味ではなくて、これをぜひお聞き願いたいと思う点があるんです。

それは前回、ああした格好で最後の時間切れ直前に多数決、そういう、学校統廃合というような、あるいは学校をどうするかという場合にふさわしくないやり方だといまだに思っていますが、そういうことでひとつの結論が出たわけですね。

しかしあれからよく考えてみると、例えばあのときには荻原委員さんがよんどころない事情で欠席されていた。そして、採決する場合にはドタバタだったものですから、私は言いかけていて言えなかったのですが、委員長さんは普通は採決に加わらないというのが普通の運営だと思うのですね。

そうしていくと、それにもかかわらず 8 対 5 という数字になったことの重みをどう受け止めるかということがあると思うのですね。私は最終的に 1 人や 2 人という絶対少数であるならば、これは大方の了解が得られたということになると思うのですが、しかしわずか 14 名の委員の中で 5 人も、あるいはそれ以上の異論があるということについて、本当に重要に受け取る必要がある。

これは物事は確かに最終的には多数決で決めるという、ひとつの習慣ではありますが、本当にどうなのか。こういう格好で、4 ページの(3)のように、野沢南高等学校を多部制・単位制に転換していく、このように断言できるのかという思いがあるんです。

従って最終報告をまとめるわけですから、文言をどうするということですから、それはやはり何らかの非常に短い言葉にする必要はありますが、私はあえてその思いを申し上げて、これについてもう少し議論を、つまりまとめとしてどういうふうにするのかということを見通しながらという、大変無理な発言と承知しながらも言わずにはられないんです。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

答申の中に、入れる意見ではなくて前回の野沢南高校を多部制・単位制に転換していくという結論を出した、その件についてご意見がございました。私自身もじゅうぶん、短時間でありましたが、委員の皆さんのご意見をいただきながら、どういう方向がいいか、是か非か。これも私自身が蒸し返すつもりはございませんが、始めは3つの考えを述べていたつもりであります。

野沢南高を転換する方向の意見、そして佐藤委員が言った野沢北と一緒にする意見、それからもうひとつ、確か滝澤委員からだったと思いますが、佐久の中心にある高校を全部視野に入れて考えていったらどうかと、この3つの意見をひとつ決めましょうと、そんな意見を申したつもりであります。

そうしましたら、新たな意見では困るという意見が出てまいりました。要は今ここで、野沢の多部制・単位制というものが出ているんだから、それをどうするかを決めて、その先へ行けという話で、あのような採決になった経緯があります。

ですから当然その中で、確かに拮抗はしておりますが、皆さんの十分な意見が入っているわけです。また委員長の採決に入るか入らないかというのも、私自身、ほかのところでこういう会議はしておりますが、委員会というのは大体委員長が入るんですね。そして議会、大きな議会になると議長は入りません。

そういうことは私も承知しております、その辺よくわからなかったものですから、こちらのほうに精通している遠山委員と芹澤委員にちょっとお声をかけましたら、それは委員長は入るんだというお答えをいただいたものですから、私も採決に加わりました。そんな経緯もご理解をいただきたいと思います。

確かにいろんな抗議の文章をいただいております。この委員会が始まる冒頭に申し上げましたように、それを真摯に受け止めながら、よりいい転換をしていくんだという、その報告をすることが私は大事だろうと思います。私はこの委員会で、ひとつの結果、前回出したものを翻すことではなく、よりいい形で私たちは報告書を作ることが大事だろうと思っています。

それを受けて、県教委は実施計画に当たって、いくつか佐藤委員さん、その他から出ておりますように地域とどういう意見の同意を持っていくのか。私たちがいろいろ指図することでもないですから、じゅうぶんそのような検討をして、前向きなもの、前向きな実施計画をつくっていただけることだろうと思っています。

そんなことでご理解をいただきたいと思います。

今日の時間が過ぎてしまいました。今日もまた延長ということではいけませんものから、ここで切りたいと思います。今日議論に至らなかった、ご意見をいただくに至らなかった第6区のその他の学校について、そして定時制の再編、これは本当にまだ前半議論をただけでありますから、その辺を報告書に盛り込むなら、それはその辺も含めて構いません。

それからご意見をいただいた前半の部分のところでも、委員の皆さんからご意見がありましたら、どうぞ文書で。口頭ですとだめですから、文書で事務局へいただいてから、私と佐藤副委員長へいただいたものを整理して次回提案をもう一度して、皆さんから議論を

いただきたいと思います。そんなことでよろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。

それでは、今日の委員会は以上にしますが、次回の委員会の開催について、事務局からお願いします。

（植松主任教育支援主事）

次回につきまして、先ほど委員の皆さまからご都合をお伺いするようなものもいただいておりますので、その辺を参考にしながら至急に調整をいたしまして、次回につきまして委員の皆さまにご連絡を差し上げたいと存じます。そんなことで、お願いしたいと存じます。

また委員長からもお話がございましたように、ご意見等は事務局を通してまた、委員長、副委員長へお渡ししたいと思いますので、ファックス等で、あるいはメール等でも結構でございますので、こちらへいただければと存じますので、そんなことでよろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。

委員の皆さんに、次回の委員会開催の確認のペーパーがいておりまして、それも集計して事務局から早急に連絡するということですから、それでよろしいでしょうか。はい。

それではそのような形で、次回は委員会を開催させていただきます。今日のご苦労さまでございました。ありがとうございます。